清里でちょいと元気をもらってきました

今年も有り難う清涼の清里

8/20-22 清里での「オープンレクチャー」に参加して、心身とも元気になって戻ってきました。一時のような清里ブームは去っていますが、高原の緑豊かな静謐さがまず心を癒してくれます。清里は標高 1,350m ですから、箱根なら最高峰の神山（標高 1,438m）と並ぶ駒ヶ岳（標高 1,356m）並みの高さです。標高が 100m 高くなると 0.6.C 気温が下がるといわれますが、海辺の小田原より 13.5×0.6 で 8℃ほど低温になるということになります。今年も有り難う清涼の清里。清里入りした私の心から出たのはこの感謝の言葉でした。「オープンレクチャー」と言ってもおわかり難いことと思われますが、読書会流れの勉強会と言ってもよいのではないかと思います。毎年選ばれたメンバーが学んだ事項についてレクチャーし、聴いたメンバーと意見を交わしあうのですが、この「オープンレクチャー」も創設以来 25 年目。年に 1 回おなじみのメンバーと顔を合わせ、相変わらず元気な姿を確認しあえるのですから、8 月下旬ともなるとメンバーの心が「今年も清里詣でをしなくては」と傾くのももっともなことだと思われます。

古くて長いお付き合い

メンバー間の出会いの中では、栗田信治兄（箱根を挟んだ向かいの沼津東高出身）と小田高出身の私の“自称名門高校出身者“同士の出会いが最も古いものではないかと改めて思っています。18 歳大学入学の年(1959 年)に入った駒場寮で同室だったうえに、本郷に進んでからも大河内ゼミでも机を並べていたのですから無慮 75 年間のお付き合いになります。これに、日本女子大の教授をされていた江口英一先生が大河内ゼミに指導教官として加わっておられたことから、栗田兄と私の両名が出かけた日本女子大の学園祭（目白祭？）の江口ゼミ展示場におられたのが、なんと松尾ゼミ・メンバーだった森芳子嬢だったのです。それをきっかけにマルクス経済学仲間になったのですが、森芳子嬢は殊の外向学心が強く、自ら読んで得るところがあったマルクス著の「資本論」を読むように私たちに持ち掛けられてきました。読書会らしきものはこの時以来ですから「オープンレクチャー」の原点は 64 年前にありと言うことができそうです。

“分かりやすい言葉で話す・聴く”を原点に

「資本論」を読んだお陰で私は、単純に社会思想家だとばかり思っていたマルクスを立派な経済学者として認識しなおすことができたのですから、現姓の「桑原さん」呼ばわりはせず、往年のマルクス少女の面影を忍びつつ「森芳子姫」呼ばわりを続けさせていただいております。安保闘争盛んな頃駒場の構内でマルキストさながらのアジ演説をしていた西部邁氏は、晩年になって、「初めて資本論を読んだ。しかし、あまりに幼稚な表現なので驚いた。」という旨語っていました。初めて受けた経済学部の講義で、「月に満ち干があることも、一旦地球の立場から離れて、地球と月と太陽の位置関係を客体視してみないと分かりません」という講義を聴いて、「マルクス経済学は経済を客観視する学問なのだ」と悟った時のことを思い出します。資本論では、決してマルキストが使うような難解な言葉が用いられているわけではありません。分かりやすい言葉で理路整然と説いているのですが、気の毒なことに西部邁氏には“分かりやすい言葉” が“幼稚な表現”としか目に映らなかったことでしょう。「オープンレクチャー」が 25 周年を迎えたのも、資本論流の“分かりやすい言葉で話す・聴く”を原点に運営を続けてこられた森芳子姫のお陰なのではないかと思います。

学習塾を営みながらヘーゲル研究を続ける在野の哲学者

この「オープンレクチャー」のリーダーとなっている長谷川宏先生について Wikipedia では「学習塾を営みながらヘーゲル研究を続ける在野の哲学者。難解なヘーゲルの哲学書を、従来の専門家的な訳語を避けて平易な言葉で訳した功績は大きい。」と、そしてまた、最近出版された『日本精神史』について、「ヨーロッパの文化と思想を研究

対象としてきた著者は、ここ 20 年ほど、日本の文化と思想の研究にとりくみ、その流れを歴史的に追跡してきた。その成果がついに一書にまとまったのが本書である。」と紹介しています。その通り、初めてお話しをお聞きした時には、どんなに難しい哲学談話かと思いきや、専門家的な訳語が含まれずすべて“平易な言葉”でお話しいただきましたので、哲学が門外漢であった私に近いものと感じられとても嬉しい気持がしたものでした。しかも、分析対象を、哲学者から”日本の文化と思想“を作り上げてきた文学者などの芸術作家に広げて来られましたので、私たちも関心を高めて「オープンレクチャー」の場で『日本精神史』の原稿にする感想や意見などを発表させていただきました。「先生も感想や意見などに熱心に耳を傾けられて納得された部分をこの書に採り入れてくださったのだ」と思いながら講談社より売り出された『日本精神史』を手にすることができたのも素敵な体験でした。

“徹底的に客観視して分析する”事例に遭遇

「オープンレクチャー」の会場は竹早山荘で、都立竹早高校から日本女子大を通して森芳子姫と同期の岩田隆子さんが管理人を務められてきて、敷地面積 1 万坪という樹々が立ち並ぶ広大な土地の手入れをされながら、気持ちの良い応対をしてくださる従業員のみなさんとともに来訪者の面倒を見てくださっています。今年はその岩田隆子さんが食事の時にクイズ調で話されていた「清里を含む中央自動車道界隈が発展してきた理由は何か」という問いが特に強く印象に残っています。答えは「朝鮮戦争の米軍兵士用の食糧調達地として選ばれた野辺山を繋ぐ自動車道が建設されたため」だったのですが、「観光開発が積極的に行われてきたからさ」とばかり思ってきた私には「こんなところにも朝鮮特需の影響が及んでいたのか！」と驚くばかりのことでした。往時の日本企業では品質管理（QC）の思想が幅広く採り入れられていましたね。東芝社員であった私も「真の問題点を把握するためには Why/Because を 7 回繰り返すこと」と教えられこれを実践するよう努めてきました。「販売が不振だ。それでは販売促進策を講じよう。」といった因果関係の分析を欠く平板な思考で進んでいたら、販売不振をもたらした真の問題点を把握することができず、従って問題点を除去する対策を打つことができないからです。岩田隆子さんは Why/Because を繰り返した結果「朝鮮特需」というキーワードを得られたものと思われます。改めて、“分かりやすい言葉で話す・聴く”ばかりでなくて、“徹底的に客観視して分析する”姿勢を持って臨まなければと姿勢を正していただいたような気がしました。

“及ばずながら私も”という気持ちになりました

「オープンレクチャー」で「映画 “蟻の兵隊”」のレクチャーをされた藤原勇彦さんのお話を聴いて、1945 年 8 月 15 日に日本が終戦を迎えたにもかかわらず軍の命令に従って中国に残留していて、昭和 29 年（1954 年）になってようやく日本に帰還することが出来た元日本兵がいたということを知って驚きました。“蟻の兵隊”とは、中国山西省で敗戦を迎えた北支派遣第一軍の将兵 2600 人が残留を命じられ、国民党系軍閥部隊として 3 年 8 カ月にわたって共産党軍との戦闘に従事させられ 500 人が死亡し 700 人が捕虜となった部隊のことを示します。“蟻の兵隊”というのも自らの命名だそうです。いかにも、通常の元日本兵さながらに、「私たちは命令に従い、蟻のようにただ黙々と戦っただけだ」と戦線に赴いていた様子がうかがわれるところですが、帰還した「残留日本軍部隊」の面々は、「自らの意思で中国に残り、傭兵として中国の内戦を闘った」と見なされて、戦後補償の対象外とされ、救済措置を求めて国を訴えた裁判でも裁判所はまったく相手にしていないような判決が出されたとのことでした。思えば、裁判官諸氏も法学部出身の面々。官僚出身の代議士と同様で、学生時代から勉強熱心で、周囲から“頭がいい秀才”呼ばわりされていたのでしょう。“頭がいい”のは確かでしょうが、その優れたところは記憶能力だけで分析立案能力は乏しいのではないかと思います。藤原勇彦さんによると、今年は全国で“蟻の兵隊”の上映活動が広がっていて、大学生や高校生の若い人が積極的に参加しているそうです。及ばずながら私も、映画 “蟻の兵隊” の DVD（Amazon にて 4,419 円で入手可）を入手して小田原界隈の政治家にお勧めしてみようと思いました。